

# 実践のプロファイリング手法を用いた 協働のまちづくりにおける調整役機能分析

坂本 真理子<sup>1</sup>・山中 英生<sup>2</sup>・澤田 俊明<sup>3</sup>

<sup>1</sup>正会員 徳島大学大学院 博士後期課程 先端技術科学教育部 (〒770-8506 徳島市南常三島2丁目1番地)

E-mail: mariko-s@beetle.ocn.ne.jp

<sup>2</sup>正会員 徳島大学教授 大学院 ソシオテクノサイエンス研究部 (同上)

E-mail: yamanaka@ce.tokushima-u.ac.jp

<sup>3</sup>正会員 徳島大学客員教授 地域創生センター (〒770-8506 徳島市新蔵町2丁目24番地)

E-mail: tksswduwhu@quolia.ne.jp

協働のまちづくりの実践においては、多様なステークホルダーの利害を調整する調整役による調整機能が重要な鍵となっているもののその実態は見えにくく、知見として整理されていない。本研究は、「実践のプロファイリング手法」を用い、立場や専門の異なる5名のプロフィールから、調整役としての機能・役割を明らかにするものである。ここでは、分析の手がかりとして3つの既存研究から調整役機能のキーワードを抽出、整理したものと、1名のプロフィールとの比較分析を試みた。その結果、ほぼすべてのキーワードにあてはまる具体的行動がプロフィールに見られたこと、新たなキーワードとして「参加者意思決定の推進」に関わる機能の存在が明らかになった。

**Key Words :** *collaboration coordinator, revitalization of community, Profiles of Practitioner, functional analysis,*

## 1. はじめに

地域の課題解決や新たな価値創造を図るまちづくりは、人口減少や超高齢化、地球温暖化、防災、福祉等、多様な分野において実践されており、2016年には「まち・ひと・しごと創生基本方針」が閣議決定されるなど、国家の課題解決に向けて、一層の進展が求められている。

まちづくりはテーマ、規模、主体、期間等多様である一方で、共通した課題は複数のステークホルダーによる協働が必要不可欠であることである。したがってまちづくりにおいては多様なステークホルダーの利害を調整を担う多様な立場が存在し、その調整役による調整機能がの善し悪しが重要な鍵となっている。しかしそうした調整役の担う調整機能、役割の実態は見えにくく、知見として整理されていない。複数のステークホルダーによる協働のまちづくりの実践において、調整役の立場とその調整機能・役割を明らかにし、さらには、こうした調整機能を専門として担う人材の育成や、技能の深化へと展開することがまちづくりの質的向上に重要と言える。

## 2. 本研究の特徴とアプローチ

本研究では、協働のまちづくりにおける調整役機能の実態を明らかにすることを念頭に置き、実務を捕捉する探索型研究の方法論として、Foresterによる「実践のプロファイリング」手法を用い、立場や専門の異なるまちづくりの実践者から調整役機能を分析する。このため調整役機能分析の手がかりとして3つの既存研究から調整役機能のキーワードを抽出し、共通点と相違点を整理することを目標としている。

そのため、本稿では、既存研究の対象として、児島ら<sup>1</sup>による「戦略的協働」、ローレンス・E・サスカインド<sup>2</sup>らによる「コンセンサス・ビルディング入門」、松浦<sup>3</sup>らによる「実践のプロファイリング手法を用いた政策過程における「調整役」機能の研究」を選択し、調整役機能のキーワードを抽出整理し、収集したプロフィールについて分析を試みている。

### 3. 実践のプロファイル収集

#### (1) 実践のプロファイリング手法

実践のプロファイル分析はForester<sup>4)</sup>によって提案された手法で、課題解決に当たった実践者による行動を聴取し、多様なアクターが関わる調整過程の中での、価値観、行動形式、調整力の鍵などの要素を分析する方法である。この手法は、本人が困難を感じた取り組みについて、本人の言葉によるストーリーを記述する。このとき、実践者本人の経験を抽象化した概念や感想を聞きだすのではなく、実際に個別の現場で起きた出来事をありのままに聞き出すことを重視する。あくまで「起きた出来事」をプロファイルとして整理するが、発言に含まれる感情表現や、緊張感のあった場面での状況のストーリーを重視する特徴がある。こうした特徴から、Forester<sup>5)</sup>はプロファイル分析をcritical（批判的）でnaturalistic（中立的）と説明している。言説分析ではあるが、緊張感のある場面に着目するためcriticalであり、理論を先に置かず実践者自身の判断を捕捉する点でnaturalである。

プロファイル手法と類似する研究として、「物語分析」と呼ばれる手法がある。澤崎ら<sup>6)</sup>は川越まちづくりにおける成功の要素を地域の物語を解釈することによって導いており、「解釈学的方法」の重要性を示唆している。また、都市計画分野においては「オーラルヒストリー」と呼ばれる手法が、後藤ら<sup>7)</sup>によって適用されている。松浦らによると、これらの手法と比較すると、プロファイル手法は歴史よりも実務への理解を深めることに目的があり、事実関係よりも個人によるストーリーの描出に着目し、対象者による解釈を極力排除する点に特徴を持つとしている。

プロファイルの制作手順については、コーネル大学の講義で用いられているガイドライン<sup>8)</sup>を参考に行った。第1に準備段階に何のためにプロファイルを作成したいのかを明確にし、聞き取り対象者と事例を特定する。次に、事前に対象者への同意を得たうえで、対象者への聞き取り調査を実施する。聞き取り結果をそのまま文字起こししたものを、読みやすさを考慮し、編集を加える。編集には、調査者の判断で、対象者の言葉を補って追記することは許されないとしている。

#### (2) 実践のプロファイル収集

本研究では、立場や専門の異なる5名のプロファイルを収集した。収集対象者には、協働のまちづくりにおけるコンサルタント、プレーヤー、プロデューサー、デザイナーの立場を選択した。コンサルタントは、農山村地域に自ら拠点を持ち、地域に固定的に関わる第3者的人材、NPO等プレーヤーは、自らの地域の協働のまちづ

くり活動を実行する人材である。NPO等プロデューサーは、自らの地域の協働のまちづくりを創出し、他地域へも波及させる影響力のある人材で、今回の対象者2名は民間出身者、行政職員出身者が含まれている。デザイナーは、他地域から依頼され、期間限定で地域と関わり専門技術を提供する人材であった。これらの5名から、過去3年以内における困難だけでも達成感のあったプロジェクト（目的をもって取り組んだ事例）について、どのような行動をしたか、そのプロジェクトから得た教訓は何かを聞き出すヒアリングを行って、その内容をプロファイルとして作成した。

表-1 プロファイル対象者5名のプロジェクト内容

立場	専門	プロファイル対象プロジェクト
コンサルタント	景観、合意形成、地域計画	・K町における重要文化的景観「檜原の棚田」選定
NPO等プレーヤー	グラフィックデザイナー	・K駅前まちづくり会議の立ち上げ
NPO等プロデューサー	都市計画、国土計画、公共政策	・S市における集落再生プロジェクト
NPO等プロデューサー	まちづくり、地方創生	・K町におけるワーク・イン・レジデンス
デザイナー	都市設計	・K市大清水空間および中心市街地整備 ・H市駅前広場整備

### 4. 調整役機能のキーワード抽出

次に、既存研究から調整役の機能についてのキーワードを抽出し、整理を試みた。

#### (1) 戦略的協働における調整役機能

児島らが提唱する「協働の窓モデル」は、協働プロジェクトに関わる参加者の行為としての活動に焦点を合わせて協働を分析するモデルであり、活動を中心的な流れとし、問題、解決策、組織のやる気の流れで構成されている。本モデルでは、協働アクティビストが問題、解決策、組織のやる気を活動の流れに投げ込む役割、活動の流れの中でそれらを結び付ける役割を果たしていることが指摘されている。また、協働実現期には、複数の協働アクティビストがアジェンダ、諸解決策、組織のやる気、活動状況の完全なパッケージを構成することが示されている。

本研究では、戦略的協働を構成する8つの活動と、戦略的協働の一般的特徴である18の命題から、調整に関する行動を抽出した。これらの活動は主に協働形成期に関わる内容であるが、協働前史における様々な活動の存在、

課題の認識、協働展開期における、協働の進展、波及についても含まれている。

表-2 戦略的協働における調整役機能整理

活動の種類	調整役の行動
①参加者の特定化	・参加者の意識、意欲を醸成する ・参加者の相互補完性を認識する
②協働の場の設定・活用	・複数の重層的場の設定 ・場を渡り歩く ・参加者の情報共有、意味形成を支援する
③問題の認識・定義	・複数の具体的問題を融合したアジェンダに昇華させる ・参加者にアジェンダを認識させる
④解決策の生成・特定化	・信念や思いを具現する解決策を生成する ・実行可能性を意識する（技術面・コスト面・周囲の賛同） ・解決策を参加者に説く
⑤組織のやる気の生成	・協働の危機を乗り越える ・社会的注目度を高める ・新たなプログラムを開始する ・担い手の人材育成する
⑥活動の流れの中で浮遊する狭義の活動	・活動の試行錯誤を実行（支援）する ・偶然の活動を協働プロジェクトに結び付ける
⑦協働アクティビストによる③～⑥の結び付け	・協働の窓が開く好機を発見する ・アジェンダ、諸解決策、組織のやる気、活動状況の完全なパッケージを構成する
⑧協働のガバナンス	・ルール、意思決定のしくみを形成する

(2) 合意形成における調整役機能

ローレンス・E・サスカインドらが提唱する合意形成の5つのプロセスは「招集」「役割と責任の分担」「集団問題解決のファシリテーション」「合意の達成」「約束の実行」である。これらのプロセスにおけるメディエーターの行動を抽出した結果を表-3に示す。合意形成を行うグループの活動と別に、招集者、アセスメント実施者、ファシリテーター、メディエーターはそれを支援するとりまきの活動が位置付けられている。

表-3 合意形成における調整役機能整理

プロセス	メディエーターの行動
招集	・招集者の特定 ・参加者を探索する ・関係者の利害を把握、分析する ・プロセスを提案する ・リソース（人材・お金）を確保する
役割の責任の分担	・対話の発議を支援する ・解決策にいたる可能性を評価する ・参加者の特定を支援する ・事前の調整を支援する ・議事次第を作成する ・グラウンド・ルールを作成する ・プロセススケジュールを作成する

	・予算計画をする
集団問題解決のファシリテーション	・議事次第、グラウンド・ルール、スケジュール、予算計画などを文書として示す ・議事記録を残す、公開する ・対話プロセスを管理運営する ・参加者を議論に集中させる ・ステークホルダーと個別に会う ・話し合いの場にはいない人にも働きかける ・専門家の助言を求める
合意の達成	・共通利益の最大化を図る ・パッケージ案を作り、合意を求める
約束の実行	・関係する支持母体によるパッケージ案の実施 ・合意条件に拘束力を持たせる

(3) 実践のプロファイリング手法を用いた「調整役」機能の研究における調整役機能

本研究は、「実践のプロファイリング手法を用いた政策形成過程における「調整役」機能の研究」の一環として実施したものであり、研究会全体では日本国内の多様な実務家23件のプロフィールを作成している。さらに参画研究者による勉強会における比較分析、ブレインストーミングにより、共通する機能を抽出した。その結果得られた調整役の特徴を表-4に示す。これ以外にForesterが調整役機能として指摘している、「討論の司会」「対話の促進」「交渉の調整」を参照した。

表-4 実践のプロファイリング手法を用いた「調整役」機能研究における調整役機能整理

活動の種類	調整役の行動
信頼関係構築	・地元とのパイプラインづくりをする ・地元リーダーとの事前調整をする ・ファシリテーターの能力に対する信頼を得る ・地域における複数の役割を果たす
同意の調達	・問題意識の植え付けをする ・情報提供・戦略を支援する
役割分担	・立場と役割づくりをする ・委員会の設定をする ・事務局運営をする ・参画者によるルールづくりを支援する
アジェンダの設定	・公式の場での発言を誘導する ・フィールドの気づきを誘導する
非公式の場の調整	・休憩時間の調整を行う ・会と会との間の調整を行う ・個別訪問をする
自主的ガバナンス構築	・地元の決定であることを固守する

(4) 協働のまちづくりにおける調整役機能整理

協働のまちづくりにおける調整役機能は協働プロジェクトの進展に伴い性質が異なると考え、協働プロジェクトの進展に着目した期間を区分して整理した。期間の区分については、協働が始まる前を「前史」、協働の立ち上げに関わる期間を「初動期」、協働の実現に向けた

様々な取組、協働の維持に関わる期間を「形成期」、協働の歯車が合い、実現するまでの期間を「実現期」、協働の実現が波及する期間を「展開期」とする。調整役機能整理は、前述した3つの既存研究から抽出した調整役の行動を活動の種類に区分し、具体的機能として整理した。

「前史」においては、「信頼関係構築」「参加者探索」に関わる行動を挙げた。プロジェクトとしての関わり以前の間関係の構築や、活動共有、仲間探しなどが当てはまる。「初動期」においては、「参加者の特定」「協働の場づくり」「役割分担形成」「アジェンダの設定」に関わる行動を挙げた。協働の参加者の意向が整理され、アジェンダとして認識され、プロジェクトを生み出す場づくりなどが当てはまる。「形成期」においては、「対話の促進」「交渉の調整」「解決策の生成」「参加者のやる気生成」「協働のガバナンス」に関わる行動を挙げた。協働プロジェクトの実践の場の運営、交渉、解決策の生成、参加者のやる気生成、協働プロジェクトの参加者の役割や活動を監視・調整するガバナンス生成などが当てはまる。「実現期」においては、「好機の発見」「パッケージ提案」に関わる行動を挙げた。協働プロジェクトの進展に伴い、アジェンダ、諸解決策、参加者のやる気状況、活動状況が結び付き、協働が正式に実現する好機を発見し、完全なパッケージを提案することなどが当てはまる。「展開期」においては、「約束の実行」「先例の波及」に関わる行動を挙げた。協働プロジェクトの目的を達成し、各参加者が実現したものを実行すること、さらに成果を他領域へ波及することが当てはまる。

表-5 協働のまちづくりにおける調整役機能整理

区分	活動の種類	調整役機能
前史	信頼関係構築	・参加者との信頼関係構築 ・対象地での複数の役割、活動の共有
	参加者探索	・参加者の探索 ・参加者の意識・意欲の醸成 ・参加者の相互補完性を認識
初動期	参加者の特定	・参加者の意向の整理 ・人材・お金の確保 ・プロセスの提案
	協働の場づくり	・複数の重層的場を設定 ・複数の場に橋かけ ・参加者の情報共有、意味形成
	役割分担形成	・参加者の立場と役割づくり ・対話を発議 ・議事次第を作成 ・グラウンドルール作成 ・プロセス、予算管理
	アジェンダの設定	・複数の問題をアジェンダに融合 ・参加者にアジェンダを認識させる
形成	対話の促進	・議事の公開

期		・対話プロセスの管理運営 ・専門家の助言を求める
	交渉の調整	・非公式な場における交渉 ・個別の交渉
	解決策の生成	・信念や思いの具現化 ・実行可能性の見極め(技術面・コスト面・周囲の賛同)
	参加者のやる気生成	・協働の危機を乗り越える ・社会的注目度を高める ・新たなプログラムを開始 ・担い手の人材育成
	協働のガバナンス生成	・ルール・意思決定のしくみ形成
実現期	好機の発見	・協働が実現できる好機の発見
	パッケージ提案	・共通利益の最大化を図る ・パッケージ案の作成
展開期	約束の実行	・各参加者がパッケージ案実行を支援
	先例の波及	・協働の成果を他の領域に波及

## 5. 実践のプロファイルの分析例

### (1) プロファイル対象者

対象者(K氏)は、県職員、副市長、大学特認教授を経て一般社団法人の代表として、S市を拠点に、古民家の再生、農村地域の再生等に取り組んでいる。専門は都市計画、国土計画、公共政策などである。プロファイリングの対象プロジェクトとしては、S市において2008年から開始した集落再生プロジェクトとした。本プロジェクトは過疎化にあった集落の空き家3棟をオーベルジュにリノベーションし、日本の暮らしを体験できる空間を整備したものである。現在は地域住民によるNPOと対象者が代表の組織がLLP(有限責任事業組合)を結成し、協同で宿泊施設を運営している。

### (2) 調整役機能の分析例

K氏のプロファイルから、本研究における調整役機能整理にあてはまる具体的行動を抽出した。K氏は前史においてS市の副市長の立場で対象の集落に出会い、景観的価値を再確認し、課題も認識していた。また、築城400年祭の取り組みとして市民によるまちづくりの公募や、市民参加の委員会の立ち上げ、行革としての一般社団の立ち上げを同時に行い、行政と市民の意識醸成を行った。集落再生プロジェクトの初動期においては、市役所の若手プロジェクトチームや大学と連携し、集落でのワークショップを半年で14回開催し、集落への宿泊施設を含めた活動の選択肢の提示等から、集落が農家民宿をするという目標像を決定した。集落内の交渉により、空

表-6 K氏のプロフィールにおける調整役機能の分析一覧

区分	活動の種類	調整役機能	具体的行動
前史	信頼関係構築	<ul style="list-style-type: none"> <li>参加者との信頼関係構築</li> <li>対象地での複数の役割、活動の共有</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>副市長の立場で景観的に優れた地域を調査して、集落の景観のすばらしさを再確認した</li> </ul>
	参加者探索	<ul style="list-style-type: none"> <li>参加者の探索</li> <li>参加者の意識・意欲の醸成</li> <li>参加者の相互補完性を認識</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>築城400年祭で市民によるまちづくりを公募した</li> <li>100年のまちづくり委員会を立ち上げた</li> <li>行革で民営化する一般社団法人を立ち上げた</li> <li>農家民宿をやりたい意見の存在を認識した</li> <li>市民がやりたいこと、行政ができることを認識</li> </ul>
初動期	参加者の特定	<ul style="list-style-type: none"> <li>参加者の意向の整理</li> <li>人材・お金の確保</li> <li>プロセスの提案</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>集落でWS、勉強会を半年で14回開催した</li> <li>市役所の若手プロジェクトチーム、大学等と協働した</li> </ul>
	協働の場づくり	<ul style="list-style-type: none"> <li>複数の重層的場を設定</li> <li>複数の場に橋かけ</li> <li>参加者の情報共有、意味形成</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>民営の一般社団法人、まちづくり委員会、集落でのWSを設定</li> <li>集落の魅力WSを共有した</li> </ul>
	役割分担形成	<ul style="list-style-type: none"> <li>参加者の立場と役割づくり</li> <li>対話を発議</li> <li>議事次第を作成</li> <li>グラウンドルール作成</li> <li>プロセス、予算管理</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>コミュニティの力でWS参加者が確保でき、家を貸す人ができた</li> <li>一般社団で空家をボランティアでイベント的に直す仕組みを持っていた</li> <li>集落へ宿泊施設を含めた活動の選択肢を提示した</li> <li>絵がかけて、お金も計算できた</li> <li>補助金申請書を作成した</li> </ul>
	アジェンダの設定	<ul style="list-style-type: none"> <li>複数の問題をアジェンダに融合</li> <li>参加者にアジェンダを認識させる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>地域の目標像っていうのは誰も持っていないからやっぱりしつこくWSでもして、その中でみんなが一つの目標像を持てるようにした（「集落の夢を言いあてる」）</li> <li>集落で農家民宿をする目標ができた</li> </ul>
	対話の促進	<ul style="list-style-type: none"> <li>議事の公開</li> <li>対話プロセスの管理運営</li> <li>専門家の助言を求める</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>WSを初めてから1年後にはオープンした</li> </ul>
形成期	交渉の調整	<ul style="list-style-type: none"> <li>非公式な場における交渉</li> <li>個別の交渉</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>空家3棟の改修の間に、1棟の方が2年後には帰りたいと言い出し、費用割計算等をして、約束事を決めた</li> </ul>
	解決策の生成	<ul style="list-style-type: none"> <li>信念や思いの具現化</li> <li>実行可能性の見極め（技術面・コスト面・周囲の賛同）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>3500万の事業費を3割稼働でペイできる計算が成り立ったので、会社でリスクを取って事業を実行した</li> </ul>
	参加者のやる気生成	<ul style="list-style-type: none"> <li>協働の危機を乗り越える</li> <li>社会的注目度を高める</li> <li>新たなプログラムを開始</li> <li>担い手の人材育成</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>集落の人が宿を運営したいと言い出したとき、LLPを作って共同運営することを提案した</li> <li>資金調達のため、銀行を回り、お金を貸してくれる支援者を獲得した</li> <li>日本にこしかない、LLPの制度設計をした</li> <li>宿の運営にかかる事細かな議論に参加した</li> </ul>
	協働のガバナンス生成	<ul style="list-style-type: none"> <li>ルール・意思決定のしくみ形成</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>宿の稼働率は集落が疲れない程度にした（30%程度）</li> <li>集落との議論を通した進め方をした</li> </ul>
実現期	好機の発見	<ul style="list-style-type: none"> <li>協働が実現できる好機の発見</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>3棟の改修が一気に完了し、オープンさせた</li> </ul>
	パッケージ提案	<ul style="list-style-type: none"> <li>共通利益の最大化を図る</li> <li>パッケージ案の作成</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>空家の持ち主、集落、一般社団法人の共通利益の最大化を図った</li> </ul>
展開期	約束の実行	<ul style="list-style-type: none"> <li>各参加者がパッケージ案実行を支援</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>集落による宿の運営</li> <li>一般社団による第2期計画を作成</li> </ul>
	先例の波及	<ul style="list-style-type: none"> <li>協働の成果を他の領域に波及</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>一般社団によるビジネス化</li> </ul>
共通	自己意思決定の推進		<ul style="list-style-type: none"> <li>集落自ら目標決定することの推進</li> <li>集落主体の経営会議への参加</li> <li>10年度に改修した借金がなくなり、集落に宿の運営スキルが備わることを意識する</li> </ul>

家の持ち主のワークショップ参加や、空家の提供を可能にし、K氏の一般社団は目標像を見える形にし、実行予算の算出の支援をするなど、参加者それぞれが役割を認識し、実行していた。形成期においては、改修対象になった3棟のうちの1棟が2年後に帰りたいとの申し出に対する個別の交渉や、集落で宿を運営したいと申し出があったときにLLPでの共同運営の提案、資金調達のための銀行回り、集落における事細かな議論への参加などがあった。実現期には、3棟の改修が完了し、宿の運営に関する準備や集落のやる気の成熟を見計らい、宿をオープンした。展開期には、集落による宿の運営とK氏の一般社団による第2期計画の作成、さらに、K氏らはここで得たスキームを基にビジネス展開を進めている。

K氏の具体的行動のうち、調整役機能整理に当てはまらない内容として、「参加者意思決定の推進」を抽出した。「参加者意思決定の推進」は集落自ら目標像決定することの推進、集落主体の経営会議への参加、10年度に改修した借金がなくなり、集落に宿の運営スキルが備わっていることを意識するなど、プロセスを通して、K氏の行動に表れていた。

プロフィールには、集落が「家族」、一般社団が「親戚」となって一緒になって笑えること、一個一個の現場に向き合ってその都度実行していくこと、地縁型コミュニティこそ土地の力であること、それらが重要であるとする価値観が見られた。これらの価値観がK氏の行動を支える信念であることが伺えた。

## 6. 今後の進め方

プロフィールを作成した他の4名の分析を進めており、本研究で整理した調整役機能との共通点、相違点を把握する。さらに共通点が協働のまちづくりに重要であるかどうかを考察するとともに、相違点が立場によるものか、プロジェクトによるものか、あるいはその他の要因があるのかを考察したい。それらをふまえ、協働のまちづくりに関する調整役機能・役割を明らかにする予定である。

**謝辞：**本研究は科学研究費基盤研究B(24330037)「実践のプロファイリング手法を用いた政策形成過程における調整役機能の研究」(研究代表者：東京大学 松浦正浩)の一環として、研究分担者の山中の指導のもと、坂本が実施したものである。

## 参考文献

- 1) 小島廣光, 平本健太: 戦略的協働の本質, 有斐閣, 2011
- 2) ローレンス・E. サスカインド: コンセンサス・ビルディング入門, 有斐閣, 2008
- 3) 松浦正浩, 山口行一, 山中英生, 八木絵香, 坂本真理子: 合意形成の調整役機能理解のための実践のプロファイリング手法の研究レビュー, 土木学会論文集 D3 (土木計画学), Vol. 70, No. 5, pp.L143-L150, 2014.
- 4) Forester, J. F. : *The Deliberative Practitioner*, The MIT Press, 1999.
- 5) Forester, J., Susskind, L., Umemoto, K., Matsuura, M., Paba, G., Perrone, C. and Mantysalo, R. : Learning from practice in the face of conflict and integrating technical expertise with participatory planning, *Planning Theory and Practice*, Vol. 12, No. 2, pp. 287-310, 2011.
- 6) 澤崎高則, 藤井聡, 羽鳥剛史, 長谷川大貴: 「川越まちづくり」の物語描写研究, 土木学会論文集 F5, Vol. 68, No. 1, pp. 1-15, 2012.
- 7) 後藤春彦, 佐久間康富, 田口太郎: まちづくりオーラル・ヒストリー, 水曜社, 2005.
- 8) Profiles of Practitioners  
[<https://courses2.cit.cornell.edu/fit117/>]

(2016. 7. ? 受付)